

REMINISCENCES

私のきまぐれごろ

医療法人健晴会長見クリニック 長見 晴彦



医院のスタッフと（右側が私の妻です）

W' Waves 御覧の皆様はじめまして。島根県で開業しております長見晴彦と申します。私は島根県松江市に1958年（昭和33年7月2日）誕生し地元の島根医科大学へ入学。卒業後、同大学第一外科へ入局し心臓外科に約5年間従事しました。諸事情から心臓外科から消化器外科へ転身し、主として膵臓外科、消化管外科に従事してまいりました。当時（今から約15年前）、全国の大学では臓器移植の研究が活発になされており、私自身も島根医科大学で恩師の故島根医科大学第一外科教授田村勝洋先生に師事し臨床は膵臓癌、慢性膵炎に対する膵自家移植術、研究面は大動物を用いて膵移植の実験的研究（移植膵の臓器血流と移植膵からの Prostaglandin 産生動態との関連についての研究）を行い、日本外科学会、日本移植学会、日本膵臓学会、日本消化器外科学会など幅広く発表し、また邦文、英文ともに論文を書きまくり、当時は全国区代表として頑張っておりました。移植の研究が一段落した後は消化器癌、特に膵臓癌の生物学的悪性度とその予後についての研究に没頭し国際学会、全国学会で発表し、また多くの論文をまとめあげたものです（Ann Cancer & Research も含め）。また臨床面でも私自身が島根医科大学病院第一外科病棟医長の職にもあったため、病棟の雑務に相当な時間を費やしたものです。日々多忙でありましたが充実した大学生活でした。

35歳の時、米国ミネソタ大学留学も決定していましたので自分の将来についてはもう大学で頑張り、教授を目指す以外は考えていなかったのですが、人生の夢は一瞬にして急転直下することもあります。突然、大学を辞職し開業したのです。もちろん開業するにはそれなりの理由はあったのですが、新規開業のためには多額な資金も必要ですし、医業と同時にずば抜けた経営手腕も必要です。決して安易

な選択ではなかったことは事実です。しかし持ち前の根性と日本国大和魂で頑張りぬく決意を固め、日々悪戦苦闘しながらも頑張りました。

開業当初から患者数は多く、開業半年で1日平均約100人、1年目で1日平均約150人、2年目で1日平均約200人と、多くの人に長見クリニックを利用し愛してもらいました（My clinic is doing good business）。私自身大学時代の専門が消化器外科でしたが、現在の来院患者は内科、整形外科、小児科、皮膚科、ペインクリニックと多岐にわたり、このほか診療とは別に患者さんの人生相談にも時間を費やしています。

診療所は病院に比べれば設備は明らかに劣ります。しかし開業医の役目は設備がなくても、自らの腕一本で的確な診断をつけて適切な病院の専門医に紹介することが最大の任務であり、同時に醍醐味でもあると思われれます。どんな病気であれ患者さんを全身全霊を込めて診察することを信念としています。もちろん私自身医師として万能ではないので専門外の病気は大学時代の友人、開業医の先輩、後輩に相談し、最善の治療を施してあげることを常日頃のモットーにしています。他の医師の意見を聞くことは決して恥ではなくむしろ自分自身の見識を深めることにもなり、この姿勢は今後も続けるつもりでいます。

現在1日約200人前後の患者さんを一人で診察していますが、診察終了後はさすがに疲労困憊です。しかし私には妻と4人の子供がいますので、忙しさを理由に家庭をなおざりにはできません。休日は家庭サービスも欠かさないう心がけています（これまで海外旅行3回、国内旅行5回）。開業医になって大変つらかったのが、これまで外科というチームで仕事をしていた生活から一転、孤独な仕事になっ

たこと、メスを捨てたことです。外科医が、手術のない生活を強られることは耐え切れないものがあります。最近ようやく開業医に慣れはしたものの、今でも自分が手術室で執刀している夢をみることも多々あります。暇があれば外科系の英文雑誌を読みながら新しい知識を学び、外科医としての自分の架空像を想像しています。要するに最近になって私自身以前の外科医の生活が非常に恋しくなり、これがまた自分の現在の最大のストレス、traumaになっているのも事実です。

今年50歳になります。これからの残された人生は、自分の思うように生きたいと思っています。休息をとるつもりで診療所を誰かに任せて海外へ留学してもいいとも考えています。とにかく私の人生の最終章(残り20年余りと思われるが)、子供4人を立派な社会人にすることが第一の責務、次に自分の全生命を捧げられる何かに精力を傾けること、これが今の私の心境であります。

今の世の中、政治は国内外とも不安定、政治家、官僚は自己本位主義で根性のないやつばかりで自分の利益しか考えていない。それに加えて日本のトップであるピンボケの福田総理と偏屈者の民主党代表小沢では、日本の政治、国民生活が良くなるはずがないと思います。不十分な説明のまま独り歩きした老人いじめの後期高齢者老人医療保険制度、未解決の年金問題、相次ぐ政治不信、また平気で殺人が起き、殺伐とした日本社会に対して感覚鈍麻になった日本人。人間としての良心、良識を失い人間社会の常識は形骸化してしまったのが現状です。アメリカの独裁的思想で始まったイラク戦争、一方、オリンピックを控えた中国ではチベット問題、またアメリカの低所得者層を対象にしたサブプライムローンが契機となった各国の株価暴落など人間社会は多くの問題を抱え、いや問題が多すぎます。決してわれわれ人類にとって良いことは殆どないと言っても過言ではありません。その人間が住む地球も苦しんでいます。人間の利便性のために行ってきた多岐にわたる産業開発、資源採掘が地球温暖化などを始めとし地球に被害をもたらし地球の悲鳴があちこちで聞こえているようです。どうする日本、どうする世界各国、もう一寸の余地もありません。しっかりしたリーダーが登場してこの窮地を救って欲しいもので

す。誰か救世主はいないのか。こう考えると憂鬱になる日々が毎日続きます。

その時に今回掲載している2枚の写真をみると安堵感が湧きます。1枚は日本で最も美しいと思われる宍道湖の夕日、もう1枚は私の医院の近くの日本桜百選の木次桜並木です。この2枚の写真は私の苛立つ気持ちを癒してくれます。第二次世界大戦後1960代後半から1970年代にかけて日本は高度経済成長を成し遂げ日本、いや日本人に勢いがありました。また相互理解、相互援助という人間としての暖心がありました。さらにその頃には土建屋の親爺のような庶民性と飛ぶ鳥落とす勢いを持ち合わせた田中角栄という凄腕の総理大臣がいました。このような大物が出てこないのでしょうか。日本の窮地を救って欲しい。そしてゆとりある、こころ温かい日本、世界にして欲しい。小者は要らない。とにかく救世主を待つ。私自身、若い頃は明治大学ラグビー部の名将監督故北島監督の座右の銘「前へ」、この言葉をいつも胸に掲げ、自分の人生においても常に「前進」することを考えていました。しかし今はゆっくり時間的余裕のある普通の生活がしたい。日本癌病態研究会の論文を書きまくった時代もありました。しかし今はゆっくり自分の将来、いや人生の最終章を如何にカッコよく終われるか、瞑想に耽るのが一番好きな時間です。私は医業以外に最後に世直しのため頑張ってみたいと思います。そして日本沈没、世界沈没にならないよう一役を担えればと考えております。



宍道湖の夕日と
桜並木

